

『王宮広場』から『ポリュクト』へ

村瀬延哉

(1)

『王宮広場』の初演年代は明確でないが、多分1633年後半から34年の初めであろう。作者二十代後半の作である。モンドリー一座によって上演された。生活苦のない、比較的富裕な階級の恋愛をテーマとしている。結婚前の年頃の男女の風俗を、ある程度現実に沿って描写しているという意味で、『メリット』に始まる初期喜劇の一環をなす。たとえば、一見現実離れした主人公アリドールにしても、コルネイユの献辞を読む限り、作者にヒントを与えた人物が実在したと考えてさしつかえなからう。

C'est de vous que j'ai appris que l'amour d'un honnête homme doit être toujours volontaire;¹⁾

(紳士の恋が常に意志的でなければならぬと教えられたのは、あなたからです。)

実際、ステグマンのように、モデルの名前を大胆に特定している研究者もいる²⁾。つまり、『王宮広場』は、コルネイユの生活体験の臭いがする一種の青春文学なのであって、特にアリドールの奇妙な結婚恐怖症は、青春という人生の特異な一時期を念頭におかねば理解できない。作者が結婚生活に入った三十代半ばの『ポリュクト』と較べると、両作品に現れた結婚観および人生観の違いは顕著であろう。

以下我々は、アリドールの不安心理を分析し、彼の主として対女性関係における心理上の特徴を明らかにした後、『ポリュクト』に描かれる理想的夫婦像は、このアリドール的世界のいかなる変貌あるいは継承によって可能になったかを解明したい。

まず、『王宮広場』の粗筋を紹介する。

(2)

アリドールとアンジェリックは相思相愛の仲であるが、美しいアンジェ

リックを慕う男性は多い。ドラストもその一人で、彼の妹でアンジェリックの友人であるフィリスは、彼女の気持ちを兄の方へなびかせようとする。貞淑なアンジェリックは、一笑に付す。

アリドールの友人クレアンドルもフィリスを愛する振りをしながら、内心ではアンジェリックを慕っている。ところが風変わりな主人公は、愛し過ぎていることを理由に、アンジェリックと別れる決心をする。これを聞いてクレアンドルが主人公に本心を打ち明け、アリドールの協力を得て彼女を譲り受ける約束ができれば上がる（一幕）。

アリドールは、偽手紙を使って、心変わりしたとアンジェリックに信じこませる。アリドールの裏切を知ったドラストは、絶望したアンジェリックとその両親に結婚を申し込む。一方、クレアンドルは、この機に乗じて彼女を口説こうとするが、フィリスの妨害にあって、望みを果たせない（二幕）。

ドラストとアンジェリックの婚約が成立する。アリドールは、友人のためにもう一度策略をめぐらす。婚約を後悔しているアンジェリックを言葉巧みに説得し、その夜の祝宴の騒ぎにまぎれて、誘拐することを承知させる。一方、駆落によって著しく世間体を傷つけられると考えたアンジェリックは、己れの名誉を守るために、結婚を約した署名入りの書附を、アリドールに要求する（三幕）。

アリドールは、クレアンドルの署名のある書附を、アンジェリックに渡す。暗闇なので、彼女は署名の取り替えに気がつかない。

この後、彼女を尾行していたフィリスが誤って、クレアンドルの一味に誘拐される。

誘拐されたはずのアンジェリックに出会って、アリドールは驚く。不実をなじるアンジェリックとのやりとりが続くうちに、ドラストとその仲間が現れ、アリドールだけが逃げ去る。

彼女は、約束書にクレアンドルの署名を発見し、恋人の仕打ちに真底絶望する（四幕）。

クレアンドルは、フィリスとよりが戻って結婚することになる。アンジェリックを、もはやドラストにもクレアンドルにも渡す必要はない。彼女への愛が甦ったアリドールは、歓喜して言い寄るが、アンジェリックは不実な恋人の申し出を拒絶して修道院に入る（五幕）。

(3)

アリドールの結婚拒否には、一見相矛盾する動機が存在する。一方では、二人の愛が強過ぎるといふ逆説的な動機が挙げられ、他方では、アンジェリックへの恋心がいつまでも続き得るかという問いが発せられる。主人公は、現在においては激し過ぎる恋をもてあまし、未来においては恋の消滅を恐れているのである。

まず、第一の観点から検討してみよう。この場合、主人公にとって、愛し過ぎることと、愛され過ぎることが、共に苦痛の原因になる。どちらも彼の自由を束縛し、心の平安をかき乱すもののように感じられるからである。

愛される苦痛は、このように表現されている。

Ce n'est qu'en m'aimant trop qu'elle me fait mourir; / Un moment de froideur, et je pourrais guérir; / Une mauvaise œillade, un peu de jalousie, / Et j'en aurais soudain passé ma fantaisie:³⁾

(私を余りにも愛してくれるからこそ、死ぬほど苦しいのだ。ほんのしばらくでも冷たければ、私の苦しみも癒されるだろうに。不実な秋波を送り、少しはやきもちを焼くことでもあれば、私の思いも直ちに彼女から離れただろうに。)

また、アンジェリックの愛情の豊かさ、濃やかな心配りに言及した、皮肉な台詞もある。

Accablé de faveurs à mon repos fatales,⁴⁾

(私が安息を得るには致命的な、愛情あふれた行いに悩まされ、)

一方、愛し過ぎる苦痛についても述べられている。

Mes pensers ne sauraient m'entretenir que d'elle; / Je sens de ses regards mes plaisirs se borner; Et de tous mes soucis la liberté bannie / Me soumet en esclave à trop de tyrannie.⁵⁾

(私の思いは彼女のことだけで一杯だし、喜びも彼女の眼差以外からは生まれぬのが感じられる。……恋故のありとあらゆる心配りのせいで、自由がなくなってしまう、私は奴隷のように、恋の過大な専横に苦しんでいる。)

アリドールの苦悩は、彼の思考とか感情とかが、ことごとくアンジェリックに集中してしまう、張りつめた神経の緊張から生まれる。一種の神経過敏症である。もちろん、アンジェリックの方も、心を凝らしてアリドール

の様子をうかがい、すきならば彼のために尽くそう、自分の愛を示そうと待ち構えている。余りにも強く抱擁する恋人同志が、かえって相手を胸苦しくさせるように、精神的に互いに執着し過ぎ、理想の恋人同志であろうとするために、苦痛が生まれる。

確かに、二人は純真無垢な若者であるが、一個の独立した人間として、対人関係において適度な距離をとる術を知らない。自分の感情を抑え、冷静に相手と対応することができない。その意味で、未だ幼さを残した人物と言えよう。

しかし、アリドールは、この過剰な愛とは逆の、むしろ愛の欠如を示唆する台詞も口にしている。

J'idolâtre Angélique: elle est belle aujourd'hui, / Mais sa beauté peut-elle autant durer que lui (= nœud)? / Et pour peu que qu'elle dure, aucun me peut-il dire / Si je pourrai l'aimer jusqu'à ce qu'elle expire? / Du temps, qui change tout, les révolutions / Ne changent-elles pas nos résolutions? N'a-t-on point d'autres goûts en un âge qu'en l'autre?⁶⁾

(私はアンジェリックを熱愛している。今彼女は美しい。しかし彼女の美貌は、結婚の絆と同じだけ続き得るだろうか。しばらくは続くとしても、最期まで彼女を愛せると誰が言えよう。すべてを変える時の流れは、我々の決心まで変えてしまうのではないか。……その時々によって、別の好みを持つのではないか。)

アリドールの理想は、その時々気分任せて、感情の赴くままに生きることらしい。何ものにもとらわれない、自由気ままな人生。しかし、愛を持続させるには、そうしようとする意志と努力も必要であるという素朴な事実が無視されている。

彼がアンジェリックに心惹かれる理由を、もう少し注意深く検討してみよう。まず彼女の美しさ。だが、これは、先の主人公の台詞が示す通り、持続的な愛を保証するに、十分な理由ではない。それ以外では、既にふれたように、彼女の主人公に対する貞節と、愛情にあふれた心配りが、美点として強調されている。

..... elle est parfaite, et sa perfection / N'approche point encor de son affection; / Point de refus pour moi, point d'heures inégales; / Sitôt qu'elle voit jour à d'innocents plaisirs, / Je vois qu'elle de-

vine et prévient mes désirs;⁷⁾

(……彼女には欠けるところがない。しかもその完璧ささえも、彼女の愛情の深さには遠く及ばない。私に厭と言うことはないし、愛情にむらのある時は全くない。……不純に墜さぬ楽しみのお機会とみればたちまち、彼女は私の望みを見抜き、早々と叶えてくれるのがよく分かる。)

アンジェリックの貞淑と献身は、偏屈な主人公には、彼女と別れる口実にもなるのだが、恋人の長所として、こうした点が、まず意識にのぼったということは、愛における彼の受動的性格を示すものとして、注目に価する。つまり、後ほどもう一度言及するが、彼には愛されるから愛すというところがある。アンジェリックの一途な献身について、主人公がなんと批判しようとして、献身を欠いた女性に、彼が誠実な愛情を抱いたかどうかは疑わしい。

二人の関係は、丁度子供と母親の関係に似ていて、主人公はアンジェリックの愛情に包まれて心地良く生きているくせに、成長し少々大きくなり過ぎた子供の常で、母親に反抗し、その影響下を脱して一人で生きてみたいと、夢想するのである。

※ ※ ※

以上の指摘から、アリドールの男性としての未熟さは明らかであろう。第一に、対人関係において一個の独立した人間として振舞い、相手もまたいかに恋人であろうと、一人の他人であるという基本的認識を欠いている。第二に、感情や感覚の命ずるままに生きる気楽な生活に執着を示し、これに反するような努力や意志を無視している。これらの事実からして、アリドールの対女性関係には、母子関係に似た受動的あるいはナルシスト的とも呼べる性格が存在する。

彼の不安は、結局こうした彼自身の存在の脆さに帰因している。特に恋愛のように、深く自分を係わらせなければならぬ人間関係は、彼にとって重荷に、不安の原因になる。過剰な感情と無用な心使いのために、神経をすり減らし、関係を放棄したくなる。かくて、主人公は短絡した過激な手段に訴える。

(4)

彼は、アンジェリックと結婚し、様々な感情的齟齬や生活上の苦勞を克

服しながら、愛と自己を確立していくという、まっとうな道を選ばない。苦難を予想させるこうした生き方を選ぶ代わりに、愛情関係を清算し、孤独に逃げこむことによって、自由をとり戻そうとする。逃避を選択する。

ただし、この選択にはある種の胡散臭さが伴う。本心から、関係の清算を望んでいたのか。ただ別れるだけでは満足できず、アンジェリックの憎しみを買うという目的で、主人公は、無用ともみえる、一種サディスティックな行為を（もっとも、アリドールがまだ彼女を愛しているとすれば、それは同時に自虐的な行為でもあるのだが）、続けるのである。

*Je la veux offenser pour acquérir sa haine,*⁸⁾

（私は彼女から憎まれるために、彼女を侮辱したい。）

まず一幕では、恋人を、まるで物でも扱うように、友人に譲り渡す約束をする。二幕二場では、自分の心変わりを彼女の醜さのせいにして、アンジェリックをののしり、揚句に鏡を突きつける。三幕になると、彼女の未練につけこんで、言葉巧みに駆落の約束をさせるが、これもまた、彼女をクレアンドルに引渡すために他ならない。さらにこの後、彼女の名誉にとって致命的な、クレアンドルとの結婚の誓約書を偽って手渡す。

アリドールの侮辱の仕方がしつこ過ぎる点は、作者自身も意識していたらしい。

*Puisque sa passion l'importune tellement qu'il veut bien outrager sa maîtresse pour s'en défaire, il devrait se contenter de ce premier effort, qui la fait obtenir à Doraste, sans s'embarrasser de nouveau pour l'intérêt d'un ami, et hasarder en sa considération un repos qui lui est si précieux.*⁹⁾

（己れの情熱に悩まされた揚句、恋人を厄介払いするために侮辱しようと思うのだから、彼は、結果的に彼女がドラストのものとなるこの一番目の試みだけで、満足すべきであろう。改めて友人のために苦勞したり、彼のことを斟酌する余り、自分にとってあれほど貴重な心の平安を危機にさらすべきではなからう。）

作者も指摘する通り、主人公は心の平安という本来の目的から逸脱し、まるでアンジェリックを侮辱することに喜びを見い出しているかのようだ。しかも、その結果どうなったか。終幕近い五幕三場で、今なお彼女が自分を愛していると錯覚したアリドールは、忽然として愛に目覚める。

Plus je t'étais ingrat, plus tu me chérissais; / Et ton ardeur croissait

plus je te trahissais. C'est en vain qu'on résiste aux traits d'un beau visage; / En vain, On veut ne le point aimer quand on s'en voit aimé.¹⁰⁾

(私が恩知らずになればなるほど、お前は私を愛しんでくれた。裏切れば裏切るほど、お前の情熱は増した。……美しい顔の魅力に逆らっても無駄だ。自分が愛されているのが分かっている時、その顔を愛すまいとしても……不可能だ。)

ここには、一種の精神的虐待を女主人公に加えることによって、彼女の愛情を試練にかけ、愛されていることを確認して、再び愛し始めるというアリドール独特の愛の受動性が、はっきり表現されている。再び、作者の言葉を借りるなら、

de sorte qu'il semble ne commencer à l'aimer véritablement que quand il lui a donné sujet de le haïr.¹¹⁾

(従って、彼女に自分を憎む根拠を与えてしまった時になってやっと、彼は本当に彼女を愛し出したかのようである。)

ということになる。

我々は、先ほど時と共に移り変わる人の心のはかなさを嘆く主人公の台詞を引用した。彼は、一つには、いつアンジェリックを愛さなくなるかも知れぬ己れの心の不確かさ故に、結婚を拒否したのだった。しかし、彼の愛における受身的姿勢を念頭に置く時、疑問が湧いてくる。彼が結婚を拒否した本当の理由は別にあったのではないか。多分男性としてのプライドがあって、口にしなかったけれど、彼が恐れていたのは、愛さなくなることと同様あるいはそれ以上に、愛されなくなることではなかったか。

青春の孤独と不安の中で、愛情などという不確かなものと縁を切って生きるように主人公を促した本当の理由は、恐らくこの点にあったのである。

(5)

『ポリュクト』の美しさと安定感はどこから来るのだろうか。¹²⁾ ポリーヌをめぐるポリュクトとセヴェールの三角関係という、ある意味できわめて卑俗なテーマを扱っているにもかかわらず、これらの登場人物が嫉妬とか情欲とかを克服した、高貴な感情と倫理に従って行動しているからである。そして、とりわけポリュクトとポリーヌの強い夫婦愛が、読者に安らかな感動をもたらし。しかし注意しよう。この夫婦愛を支える上で、

より重要な役割を果たしているのはポリリーヌである。ポリュークトに関して言えば、変装したアリドールの再来という趣きがないでもない。妻帯したアリドールとも言えよう。実際、作者もまた「ポリュークト」初演の、多分二年ほど前に結婚している。

両者の類似点を見てみよう。まずポリュークトは、「王宮広場」の主人公同様恋愛のはかなさを意識し、それ以外の別の価値を追求する。ポリリーヌは、彼が見出した別の価値、つまり信仰を守り、神の至福に至る障害である。

Et je ne regarde Pauline / Que comme un obstacle à mon bien.¹³⁾

(私はポリリーヌを、私の幸福の妨げとしか思わぬ。)

第二に、彼は、妻を彼女のかつての恋人セヴェールに委ねようとする。妻への未練を断ち切るためだけにそうしたのではないとしても、この行為は、アリドールの恋人に対する酷い仕打ちを連想させる。

しかし、ポリュークトとアリドールでは決定的な相違がある。アリドールは心の平安を重んじ、気ままに生きることを願う若者にすぎなかった。ポリュークトには信仰心がある。高い理想と鉄の意志がある。この揺らぐことのない信念の故に、彼はアリドールがついに得られなかった、女性の愛と尊敬を手に入れた。

もっとも信仰は非常に微妙な問題であるので、「ポリュークト」の読者が皆主人公の行為を是認するとは限らない。異教徒であるポリリーヌやセヴェールの判断の方が、世間の常識に近いかもしれぬ。確かに、彼の死を恐れぬ行為は驚嘆に値するが、反面通俗の意味で、それが自己と家族の破滅を招く以上、狂気の沙汰としか言いようのない部分がある。

しかし、宗教劇の一面を無視しても、「ポリュークト」は依然として興味深い。我々の身近に珍しくない家庭内の葛藤を題材とした悲劇だからである。夫は、それなりの理由があるにしろ、世間的に言えば破廉恥な罪を犯してしまう。有力者である義父は、婿に対し怒りと憐憫の入りまじった複雑な感情を覚えるが、己れの保身もあって、彼の断罪に傾く。妻だけが、彼女自身も理解できない夫の身を必死でかばう。彼女に言い寄る、社会的に大成功した昔の恋人がいるにもかかわらず、この誘惑に見むきもしない。「ポリュークト」を家庭劇として見れば、主人公はポリリーヌであり、読者は何より、彼女の献身と貞淑さに感動を覚える。

彼女の献身はどこから来るのか。義務からか。

Je l'aimai par devoir; ce devoir dure encore.¹⁵⁾

(私は義務故に彼を愛した。この義務は今なお続いています。) あるいは、義務であったものが、やがて自然な愛情に変わったのか。

Je chéris sa personne, et je hais son erreur.¹⁶⁾

(私は夫の身を愛しく思い、彼の誤ちを憎むのです。) または、不可解な夫の行動も、揺らぐことのない信念を目のあたりにして、次第に彼女の心に尊敬の念を育てていったのか。恐らく、そのいずれもが、献身の理由であろう。

いずれにしろ、アリドールとポリュクトを二重写しにしてみる時、ポリヌの存在は、アリドールの問いに対する解答となろう。愛の移ろい易さはいかんともし難いものなのか。常に愛し愛されることは不可能なのか。ポリヌの献身は、それが可能なことを証明している。どのようにしてか。これこそアリドールの予想に最も反する点なのだが、結婚という束縛の中に身を置くことによって、愛することを義務とすることによってなのである。恐らくこのことは、男性よりも女性の場合により良くあてはまるために、独身のアリドールには、結婚がただただ、己れの自由を拘束するものとしか想像できなかった。

(6)

年若いアリドールは、現実をよく知らないし、女性についても同様である。彼の頭の中には、多くの幻想と未知のものに対する不安が巣くっていた。そして、繊細で誠実な心に不可避免的に宿る懐疑心の故に、自虐的かつ恋人に対しては残酷な試練を繰返した。最後に互いの愛を確認したと思った瞬間、アンジュリックは、男の余りの疑い深さ、余りの侮辱に耐え難くなって、彼を捨てた。

これに対し、同じようにポリヌを自己の幸福の妨げとみなし、他の男性に譲り渡そうとしたポリュクトは、彼女に愛想を尽かされるどころではない。逆に、かつての恋人も父親も捨てて、ポリヌは彼の後を追って来る。

この違いはどこから生じたか。既に述べた如く、第一には、二人が結婚という契約によって結ばれていたからであり、第二には、ポリュクトが、妻に理解されないまでも、少なくとも尊敬に値する人物だったからである。

この素朴な事実は、読者を安堵させる。『王宮広場』に描かれた愛の不信。

愛する者同志が傷つけあい、のたうちまわって、やがて別離に至る悲痛な世界を知る者にとって、何と穏やかな安らぎが『ポリュクト』を支配していることか。この明快なる秩序ある世界。我々を不信の泥沼から救う処方箋がここには示されている。義務を守ること。信頼を裏切らないこと。人間関係のこの原点から、ポリュクトとポリヌの夫婦愛は生まれた。

コルネイユの初期喜劇の感情だけは豊かだが、社会の実生活を送るに至っていない若者達の混沌とした世界は、このようにして傑作期の現実への深い洞察に基づいた秩序ある世界へと移行していったのである。

〔注〕

- 1) P. Corneille: *Œuvres complètes*, Éditions du Seuil, 1963, p. 150.
- 2) Cf. P. Corneille, *op. cit.*, p. 149.
Cf. A. Stegmann: *L' Héroïsme cornélien*, Armand Colin, 1968, t. 1, pp. 27–32.
- 3) *La Place royale*, I, 4, 187–190.
- 4) *Ibid.*, 194.
- 5) *Ibid.*, 214–215, 217–218.
- 6) *Ibid.*, 227–232, 234.
- 7) *Ibid.*, 191–193, 195–196.
- 8) *Ibid.*, 242.
- 9) P. Corneille, *op. cit.*, p. 150.
- 10) *La Place royale*, V, 3, 1296–1297, 1302–1305.
- 11) P. Corneille, *op. cit.*, p. 150.
- 12) Cf. 拙論, *Polyeucte* 又は恩寵の悲劇, 広島大学総合科学部言語文化研究第2号, 1977, pp. 233–263.
- 13) *Polyeucte*, IV, 2, 1143–1144.
- 14) Cf. *ibid.*, IV, 4.
- 15) *Ibid.*, III, 2, 790.
- 16) *Ibid.*, 800.

De *La Place royale* à *Polyeucte*

Nobuya MURASE

Il y a une affinité entre *Polyeucte* et *Alidor*, héros extravagant de *La Place royale*. Tous les deux considèrent leurs bien-aimées comme un obstacle à la réalisation de leur idéal. Et ils les cèdent à d'autres: ce qui est profondément blessant pour une femme, même si on le faisait pour assurer son bonheur.

Examinons de près le cas d'*Alidor*. Sa liberté et sa tranquillité d'esprit lui importent par-dessus tout. L'amour qu'il éprouve pour *Angélique* semble souvent l'empêcher de s'assurer s'il jouit toujours de cette liberté. Il explique ainsi ses tourments: "*Et de tous mes soucis la liberté bannie / Me soumet en esclave à trop de tyrannie*". Du reste, il se plaint à son ami *Cléandre* de ce qu'*Angélique* l'accable de "*faveurs fatales à son repos*". Peut-être, est-ce une âme trop sensible!

Il s'inquiète aussi de savoir s'il aimera bien toujours *Angélique*: "*Et pour peu qu'elle (= sa beauté) dure, aucun me peut-il dire / Si je pourrai l'aimer jusqu'à ce qu'elle expire ? / Du temps, qui change tout, les révolutions / Ne changent-elles pas nos résolutions?*"

D'ailleurs, il est sans doute en proie à d'autres inquiétudes, quoiqu'il hésite à l'avouer: est-il et sera-t-il vraiment aimé d'*Angélique*? C'est pourquoi il crie d'allégresse après l'avoir irrémédiablement blessée en la cédant à *Cléandre*: "*Plus je t'étais ingrat, plus tu me chérissais; / Ton ardeur croissait plus je te trahissais.*"

Comme l'auteur, *Alidor* est jeune et célibataire. Il ne comprend pas bien la réalité, ni les femmes. Ainsi se laisse-t-il quelquefois entraîner à des chimères ou des inquiétudes. Les problèmes d'amour le tourmentent.

Polyeucte est, pour ainsi dire, un *Alidor* marié. En effet, *Corneille* épousa *Marie de Lampérière* quelques années avant la première

représentation de la pièce. On peut donc dire qu'elle eut pour rôle d'apaiser les inquiétudes d'Alidor, en fournissant une réponse aux problèmes qu'il se posait.

Polyeucte, lui aussi, a conscience de la fragilité de l'amour humain. Par conséquent il se voue à l'amour de Dieu et décide de céder sa femme à Sévère. Mais, malgré cela, elle ne le quitte pas, ainsi que l'a fait Angélique. Au contraire, elle abandonne son père et son ancien amoureux, favori de l'empereur, pour suivre son mari couvert d'ignominie à en croire l'opinion publique.

Le rêve d'Alidor se réalise dans *Polyeucte*. La pièce fournit la preuve de l'existence d'un amour conjugal qui surmonte les épreuves les plus difficiles. La vie conjugale que mena l'auteur lui aurait inspiré cette confiance en la profondeur de l'amour d'une femme.